

近畿の水瓶“琵琶湖”の環境問題

滋賀大学教育学部附属中学校 上田真也

1 母なる湖・琵琶湖

面積670km²の日本最大の湖・琵琶湖は、滋賀県の約6分の1を占めている。今からおよそ400万年前に誕生したこの湖は、世界の中でもバイカル湖、カスピ海に次いで3番目に古い湖とされ、古来よりその自然の恵みと景観の美しさで人々を魅了し続けてきた。

現在琵琶湖の貯水量は、約275億m³あり、その水は瀬田川から流れ出て（一部、疏水を通じて京都に流れ込み、発電や水道に利用されている）、宇治川・淀川を経て、大阪湾にそそぎこんでいる。こうした琵琶湖・淀川水系の水利用は、水道用・工業用・農業用（右地図参照）として滋賀県内はもとより、滋賀県周辺地域約1,400万人の暮らしを支えている。また、琵琶湖国定公園として、レジャーや観光の場を提供し、県内外の人々の心の拠り所ともなっている。“Mother Lake”という言葉があるように、琵琶湖はまさに“母なる湖”なのである。

2 琵琶湖の環境問題～これまでの取り組み～

かつて琵琶湖は、その環境を激変させることとなった高度経済成長期を迎え、その後の多くの工場進出や滋賀県の人口増加に伴い、工場や家庭からの排水による富栄養化をおもな原因とする大規模な赤潮発生などを経験してきた。しかし、当時の人々の琵琶湖を守りたいという願いが、琵琶湖の環境悪化に歯止めをかけることとなる。なかでも全国的に注目されたのが、「琵琶湖富栄養化防止条例」（1980年7月1日施行）で、結果、有リンの合成洗剤の販売や使用を禁じることとなった。

さらに、琵琶湖の水を保全するおもな活動も広



「中学校社会科地図 初訂版」p.88

がりを見せ、毎年7月1日を「琵琶湖の日」とし、住民らによる湖岸一斉清掃を行ったり、ヨシ（アシ）の植栽・保護に努めたりしている。ヨシは野鳥や魚の産卵場所として重要な役割を担うだけでなく、その根からリンや窒素を吸収して湖の水質浄化に貢献できる（上地図参照）。

3 琵琶湖の環境問題～これからの取り組み～

こうした取り組みにより、かつての美しい琵琶湖の姿を取り戻していくかに見える琵琶湖ではあるが、北湖と南湖の透明度の違い（上地図参照）や年々その数を減らしている琵琶湖に古くから生息している固有種の漁獲高に危機感を募らせる声もある。さらに近年は、固有種の減少とは裏腹に増え続けているブルーギルやブラックバスといった外来種の繁殖や、水上バイクの走行による騒音公害や湖水汚濁といった新たな問題にも直面している。また、琵琶湖の循環機能を低下させる原因となる水温の変化は、地球温暖化の影響によるものといわれている。

先人より受け継ぐ琵琶湖をこれからもよりよい姿で守りぬくためにも、琵琶湖の環境問題への取り組みは、湖水の水質改善および保全や生態系の回復、水源用森林の育成など総合的かつグローバルな視点をもって取り組むことが必要とされる。そして何より重要なことは、より多くの人々が琵琶湖に関心を寄せ、琵琶湖の今を知ることであろう。